
夏休みで学んだこと。

早乙女 椎那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏休みで学んだこと。

【Nコード】

N1486M

【作者名】

早乙女 椎那

【あらすじ】

普通の中学生だった、笹本真実。真実はこの夏休みでおばあちゃんからさまざまな事を学ぶ。真実にとっては大切な勉強。真実はおばあちゃんと同じ力を持っていた。みんなが持っていない、力。それを教えてくれたのは勿論、おばあちゃん。1ヶ月の長いようで短い期間は忘れられない、おばあちゃんとの大切な思い出。

1、中2の夏

もうすぐ夏休み。中2になってもやっぱり夏休みは楽しみ。部活も塾も通っていない私は何もかもが自由。母が元中学校の先生だから、勉強は母に教えてもらえばいいし、部活をしなくても、勉強を頑張つて、自力で高校に受かって見せる。

去年までの夏休みは家で過ごししていた。母に勉強を教えてもらい、暇な人を見つけては遊ぶ。そんな毎日だった。でも、今年は違うらしい。

「今年の夏休み、真実は母さんのお母さんの家でお世話になるのよ」前から伝えられていた。

母のお母さんに会ったことないから少し不安なところもある。母に話も聞いたこともなかったし、どんな人かすらわからない。母に聞いても教えてくれない。

おばあちゃんの家に行く方法は、電車。車出してくれてもいいのに、母は電車はどこで降りれば、いい、とか分かりやすく教えてくれた。おばあちゃん家から一番近い駅からおばあちゃん家までの道のりを髪に書いてくれた。どの電車に乗ればいい、とかはすべて自分で母が言ったことをメモする。母は、そこまでやってくれない。ほとんど私自身にやらせるんだ。

出発当日の夏休み当日。午前9時。私は大きな荷物とメモと地図を手を持ち駅へと向かった。母は、教師を辞めた後に始めた仕事が忙しいそう、私が起きる前に家を出ていた、私をおばあちゃん家に預ける理由は、しぐ音が忙しいかららしい。父は単身赴任であまり家に帰ってこない。夏休みになんかなおさらだ。

私はバスにのり、駅に着くのを待っていた。お金は5万円持っている。これは、私が頑張つて集めたお金。テストでいい点数とったら、1000円。成績がオール5だったら5000円。1回手伝い

をしたら、500円。少しずつ、頑張ったのに、この夏休みで全部使ってしまうことになってしまいかも。私の努力が水の泡。

駅につき、おばあちゃん家の近くの家まで行く電車の切符を買う。ホームへ行き、私は電車が来るまでの間、おばあちゃんのことを考えた。

どんな人なんだろう？優しい人だったらいいな、母と違って、すべて自分で考えて行動しなさい、と言わない人がいい。家は田舎が望ましい。1回周りが田畑で緑に囲まれているところに住んでみたいと、思っていた。近くに丘があり、私は昼寝をしていて、そこにおばあちゃんがサンドイッチとジュースを持ってきて、一緒に食べたい。私は考えれば考えるほど、おばあちゃんに会うのが楽しみなってきた。

——間もなく、電車が参ります……——

アナウンスがなり、電車が目の前で止まった。多分、この電車。私はドアが開いたら、すぐに電車に乗り、椅子に座った。天国だ……。椅子に座れたし、何よりも涼しい。ホームは溶けそうなくらい暑かった。だから、余計、ここが涼しく感じる。私は、電車が走り出して数分たったころには寝てしまっていた。

続：中2の夏

目を覚ますと、私がおりるひとつ前の駅に電車は止まっていた。多分：乗ってから1時間ぐらい、たっていた。ああ：腰痛いし、首痛い。しかもちょっと気分悪いし…。相変わらず、冷房はガンガン入っていた。でも、このぐらいがちょうどいい。扉の近くに座っている私に、ぬるい風が当たる。

電車が動き出し、私は外を眺める。私ののぞんでいた、田舎。緑で田んぼや森がある、田舎。私は嬉しくて、早くおばあちゃん家についてほしかった。それから、数分し、目的の駅に到着した。電車から降りると、知らない風景がならんでいた。そこまでの田舎ではないけど、少し遠くには森があり、近くには最高4階建ての建物がずらつとならんでいる。私が住んでいる、場所とくらべてみれば、田舎だけど。

改札口を出ると、おばあちゃんらしき人が立っていた。

「真実ちゃん？」

「うん、そうだけど…おばあちゃん？」

「そうだよ。さ、車にお乗り」

私は助手席に座った。優しそうな人で良かった。おばあちゃんは笑顔の素敵な人で、私までが笑顔になってしまった。母とは少し違う雰囲気だ。私だったら、おばあちゃんみたいな人になりたい。

車は走り出した。初めて見る景色に、私は興奮する。私が外を眺めていると、おばあちゃんは、口を開いた。

「買い物する？服とか：色んなもの買わないと行けないでしょ？」

おばあちゃんは、60歳に見えないほど綺麗で、だいぶ若く見える。喋り方も、おばあちゃん、って感じではなく、お母さんと少し似てるような気がする。私は、「うん！！買い物したいっ」と明るく返し、また、外を眺めた。この景色、飽きない。私はこの町が気

に入った。

数分すると、車は建物の立体駐車場の中に入って行き、3階の駐車場で車を止めた。

「ついたよ」

おばあちゃんが車をおりた。私もおりる。入口の近くにある地図を見ると、3階はどうやら服屋さんがたくさんあるらしい。私は嬉しくなって、おばあちゃんについて行った。

———ぐう———

あ…。私のおながが鳴った。おばあちゃんは隣でクスッと笑う。

私は恥ずかしくなり、俯いた。

「もう、1時だね。おなががすいたでしょう？洋服を買う前に何か食べようか」

おばあちゃんが、ニツコリと私のほうを向いて言った。私は顔をあげて、うなずいた。おばあちゃんが優しい人で良かった…。私がおばあちゃんの後ろをチヨコチヨコついて行くと、店の中にあつたファミリーレストランに入って行った。ファミリーレストランなんか、何年振りだろう…。その前に、誰かと一緒に外食するの、何年振りだろう。お母さん、忙しかったから、いつも弁当とかばかりだったから…。おばあちゃんとファミリーレストランで一緒に食べれるのが、嬉しかった。

「何にする？」

「えっと…」

私は、メニューを見つめる。ハンバーグもいいし、ステーキもいい！…あ…オムライスも…。決まらずに、色んなページを何回もめくる、私を見て、おばあちゃんはわらつてた。

「おばあちゃんは、何にするの？」

「オムライスにするよ。真実ちゃん、決まった？」

「まだ悩んでるのっ」

何にしよう……。悩んだ末、写真を見て、一番おいしそうな、目玉焼きハンバーグにした。お腹すいた…。早く来ないかな。店の中

は人でいっぱい、商品が届くまで、少し時間がかかりそう。

「真実ちゃん、真実ちゃんがおばあちゃんの家に泊るのには、理由があるの」

「理由……？」

理由って何？それって、私にとって、とても重要なこと？

「中2になった真実ちゃんに話しておかないといけないの」

……そんなに大切なことなのかな。私は気になってしょうがなかった。ちょうどそこに、「目玉焼きハンバーグです」と店の人が私の前に、ハンバーグをおいた。……美味しそう！！

「オムライスももう少ししたら来ると思うから、おばあちゃんを気にせずに食べていいよ。この話は買い物をして、家に帰ってからちゃんと話すから」

「うん、ありがとう、おばあちゃん」

理由は何故なのか、気にしながらも、ハンバーグを前に早く食べたくてしょうがない私は、おばあちゃんの言葉に甘えて、食べ始めた。おばあちゃんのオムライスもそのあとすぐに来た。私とおばあちゃんは、黙々とご飯を食べる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1486m/>

夏休みで学んだこと。

2011年1月3日19時20分発行